

優秀賞（独立行政法人水資源機構理事長賞）

「水の星」地球



奈良県 奈良市立都祁中学校

一年 宮久保 晴 加

中学生になってわたしは、陸上部に入りました。試合が近く、毎日汗だくになって帰ります。お茶を飲んで休んでいると、祖母に、

「はよ体操服、洗濯機に入れや。」
とせかされます。

「今は便利になったなあ。昔は、たらい持って川へ洗濯しに行っていたのに。」

と祖母は言います。わたしは、桃太郎の昔話みたいとおかしくなりました。それにしても、昔の川は洗濯できるほどきれいだったなんて。

わたしが毎朝学校に行くときに見る川は、にごっていたり、ゴミが捨ててあったりして、とても洗濯なんて考えられないのに。祖母は、結婚して初めて洗濯機を使ったそうです。

また、ご飯を炊く井戸水をくむのは、子どもの仕事だったそうです。昔は、水を使うのに大変な労力がいり、子どもも働いていたのです。

蛇口をひねればすぐに水が出てくる今では考えられません。家に蛇口がいくつあるか数えてみると、全部で十以上もありました。わたしは苦勞せずに、その蛇口から出てくる水を当たり前のように使っています。

少し前の新聞に、次のような記事がのっていました。インドのある村の子どもたちは、村に水源がないため、何時間もかけて水をくみに行くそうです。てんびん棒に水がいっぱい入ったバケツを二つぶら下げて歩いている少年の写真もありました。わたしよりずっと小さい子です。わたしが水を出しっぱなしにして歯をみがくと、少年のバケツの半分くらいの水をあつという間に使ってしまうことになりました。新聞にはこんなことも書いてありました。「日本が一年間に輸入する食料や工業製品は大量の水を使って生産されている。それは途上国で十億人が一年間に利用する量に匹敵する。」と。

十億人といえ、ほぼインドの全人口に当たります。ショックでした。水は限りある資源なのに、日本がそんなに使ってもいいのでしょうか。

そんなことを考えていて、ふとわたしは、小さいときからお気に入りのある絵本を思い出しました。その本の名は、「しずくのぼうけん」。村の女の人のバケツから一滴のしずくが飛び出して、冒険をする話です。蒸発して空に上り、雨粒となって地上へ戻ったり、川で魚と鬼ごっこをしたり、水道管を通って蛇口から出てきたりと、いろんな所を旅するのがおもしろくて、何度も読みました。

このなつかしい本を見ながら考えました。わたしが蛇口から出した水は、もしかしたらあのインドの少年が苦勞して運んでいた水だったかもしれないし、わたしの祖母が洗濯に使っていた川の水だったかもしれないと。

地球は、「水の星」と呼ばれていると社会科で習いました。遠い昔から水は、地球を循環し続けてきた限りある資源であり、次の世代に受け継がなければならない大切な財産なのです。また、それは日本人だけでなく、地球上のすべての人や、生き物たちが共有しなければならぬものです。

わたしは、中学生になったのを機会に、もっと世界のことに関心を持ってみたいと思いました。あの記事を読まなければ、わたしは何も知らな

いまだだったでしょう。「水を大切に。」とよく聞きますが、なぜ大切にしなければならないかということが分かれば、みんな、もっと水を大切にしようになるのではないのでしょうか。今のわたしがそうであるように。蛇口から出てくる水は、みんなの水なのです。みんなが水に関心を持てば、きっと大きな成果が出るでしょう。わたしたちは、自分の国さえよければという考えを捨て、ぜいたくな暮らしを見直さなければなりません。「水の星」地球を守るために。